

「志 高きに和す 創造」

—志を胸に 高きに和して 未来を創る 子どもを育てる 学校経営の推進—

第69回全連小研究協議会佐賀大会成功裡に終わる

平成29年10月12日(木)～13日(金) 佐賀市文化会館及び周辺会場

九州の北端に位置し、自然と歴史、文化に恵まれた「焼き物のまち」佐賀県。また、激動の明治維新において、近代日本の産業革命を推進する人材を育み、今もその精神を未来への架け橋である子どもたちへと育てている佐賀県佐賀市において、10月12日(木)・13日(金)の2日間、第69回全国連合小学校長会研究協議会が全国から約2,500名の参加者を得て、盛大に開催された。

本大会は、新たな研究主題を掲げた研究大会の5年目となる。1日目は、開会式・全体会の後、13の分科会で「校長の役割と指導性」を明確にするキーワード・キーセンテンスを利用し活発な協議がされた。2日目には「未来を創る子どもたちに」をテーマとしたシンポジウムが、中島 潔氏・内山俊哉氏・15代酒井田柿右衛門氏をシンポジストに迎え、針谷玲子調査研究部長の進行で行われた。閉会式では、次期開催地の北海道大会へと「志」のバトンが渡され、「気球にのってどこまでも」を合唱し感動のうちに幕を閉じた。

大会主題

新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く

日本人の育成を目指す小学校教育の推進

～志を胸に 高きに和して 未来を創る 子どもを育てる 学校経営の推進～

開会式

- 1 開会のことば 井上淳司 大会副会長
- 2 国歌斉唱
- 3 あいさつ 種村明頼 大会会長
下川雅彦 大会実行委員長
- 4 祝辞 文部科学大臣 林 芳正様
(代読 文部科学省大臣官房審議官 白間竜一郎様)
佐賀県知事 山口祥義様
(代読 副知事 池田英雄様)
佐賀県教育委員会教育長 白水敏光様
佐賀市長 秀島敏行様
(代読 副市長 御厨安守様)
- 5 来賓紹介

使命を自覚し、強いリーダーシップを

種村 明頼 大会会長

第69回全国連合小学校長会研究協議会佐賀大会が、全国各地から多くの参加を得て、豊かな自然に恵まれた佐賀県において盛大に開催されますことに心よりお礼申し上げます。本日は、ご多用の中、文部科学大臣 林芳正様代理文部科学省大臣官房審議官 白間竜一郎様、佐賀県知事 山口祥義様代理副知事 池田英雄様、佐賀県教育委員会教育長 白水敏光様、佐賀市長 秀島敏行様代理副市長 御厨安守様、佐賀市教育委員会教育長 東島正明様代理学校教育課長 中村祐二郎様をはじめ多数のご来賓の皆様にご臨席を賜りましたことを全国連合小学校長



会を代表して、心より感謝申し上げます。

さて、現在、グローバル化は我々の社会に多様性をもたらし、急速な情報化や技術革新は生活環境を質的にも変化させつつある。また、国際情勢が安定しているとは言えない状況がある。今後、益々、この社会は、様々な要素が絡み複雑化・多様化していくことが予想される。学校教育において、家庭・地域と連携を図り、よりよい社会を創ることのできる人間の育成が、期待されている。中央教育審議会の答申では、「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、家庭・地域と連携・協働しながら、教育活動や学校経営などを改善していくことの重要性について示された。そして、2030年を見据え、変化が激しい社会を生きるための資質・能力を育成できるよう、その実現に向けて必要となる教育課程の基準として、今年3月末に、新学習指導要領が告示された。また、7月には移行措置が示され、教科等により取り扱いに違いはあるが、総則、総合的な学習の時間、特別活動、道徳科、外国語科の一部においては、平成30年度から新学習指導要領による教育活動を推進していく。学校教育のより一層の充実・発展を図るため、校長の役割は重大である。教職員のみならず、保護者・地域から信頼され、リーダーシップを発揮していかねばならない。特に、予測が困難な時代を生きる子どもたちを育成するためには、創意ある展望と計画が必要で、未来を見据え、必要な教育をイメージし、学校や地域の特性等を考慮しながら、教育目標を明確に定めるなど、グランドデザインを描いておくことが必要である。そして、それを具現化するための教育課程の編成と、確実な実施・改善に取り組む教職員の力量の向上が求められる。

全国連合小学校長会は、大会主題を「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」とし、実践的研究を進めてきた。この大会主題は、変化する時代の潮流や近未来的な課題を踏まえ、様々な分野で豊かな創造性やしなやかな知性を発揮し、互いの個性や絆を大切に社会づくりに貢献できる日本人の育成を目指して設定された。佐賀県校長会では、この大会主題を受け、大会副主題を「志を胸に 高きに和して 未来を創る 子どもを育てる 学校経営の推進」と掲げ、取り組んできた。この副主題の設定理由の中には、佐賀県の校長先生方が経営の指標としている明

治維新の一翼を担った鍋島直正公の「時代の流れを的確に読み、人を育て、組織力を高めていった生き方、考え方」の志が盛り込まれている。今後の教育活動の方向性や具体的な取組の示唆を与える質の高い研究大会になると確信している。ぜひ、受け身の聴講にとどまらず、ご自身の学校経営に照らし合わせるとともに、近未来的な視点を意識していただきながら、能動的な聴講をお願い申し上げます。

結びに、本大会の運営を推進してきた下川実行委員長をはじめとする各役員、九州地区小学校長会、佐賀県校長会等、ご尽力いただいた皆様方に感謝を申し上げ挨拶とする。

熱い議論を交わし、人材づくりの礎を

下川雅彦 大会実行委員長

平成30年には明治維新150年の節目を迎える。維新時に多くの人材を輩出した佐賀県では、現在、人づくりとものづくりに力を注ぐ気運が高まっている。

長い歴史をもつ第69回全国連合小学校長会研究協議会をここ佐賀県で初めて開催できることは、この上ない喜びと誇り、そして責任の重さを感じている。

将来の変化を予測することが困難な時代を迎えた。これからの教育では、接続可能な時代を目指して、たくましく、しなやかに生きていく力が求められている。また、新学習指導要領では、新しい時代に求められる資質や能力を育む「社会に開かれた教育課程」の理念のもと「主体的・対話的で深い学び」が授業改善の視点として示されている。これらのことを鑑み、大会副主題を「志を胸に 高きに和して 未来を創る 子どもを育てる 学校経営の推進」とした。長州、土佐、肥前へと受け継いだ「志」のバトンをもとに「主体的・対話的で深い学び」で重要となる「他者との協働」を「高きに和す」とした。未来の日本を豊かに創造してくれるように願いを込めている。

大会1日目の5領域13分科会では、過去4大会で出された成果と課題を具体的に示しながら、熱い議論を交わしていただくよう準備をしてきた。大会2日目のシンポジウムでは、佐賀県緑の著名人3名をシンポジストにお願いした。皆様で熱く語り合ってください。

本大会の開催にあたり、ご指導、ご助言を賜った文部科学省、佐賀県、佐賀県教育委員会、佐賀市、佐賀市教育委員会、佐賀市町教育委員会連合会、佐賀県PTA連合会をはじめ関係諸機関、また全国連合小学校長会役員、および関係者の皆様方に心より厚く感謝を申し上げ、

挨拶とする。

文部科学大臣祝辞代読（要旨）

文部科学省大臣官房審議官 白間竜一郎様

教育は未来への投資であり、教育再生なくしては国の成長も望めない。文部科学省は、教育再生実行会議の議論を踏まえ必要な策を推進している。これからの教育では、情報化やグローバル化が急激に進展する将来の変化を予測することが困難な時代をたくましく、しなやかに生きていく力を育てていくことが必要である。そのため、文部科学省では「社会に開かれた教育課程」「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善、子どもたちの学びを支える「カリキュラム・マネジメント」の確立などを内容とする次期学習指導要領を今年3月に公示した。平成32年度の学習指導要領全面実施に向けて必要な取組を総合的に実施していく。また、4月に公表した「平成28年度の教員勤務実態調査結果」の集計で示したように、先生方の長時間勤務の実態は看過できない状態である。学校における働き方改革を早急に進めていく必要がある。中央教育審議会初等中等教育分科会「学校における働き方改革特別部会」は、本年8月「学校における働き方改革に係る緊急提言」を取りまとめた。その提言に基づき、教職員定数の改善や業務改善加速事業の実施、部活動の適正化などの方策を総合的に検討し、教員の業務負担軽減を、スピード感をもって推進していく。

先を見通すことの難しい時代をたくましく生き抜いていくには、生涯を通じて不断に学び、考え、予想外の事態を乗り越えながら、自らの人生を切り拓き、他者と協力し合ってよりよい社会づくりに貢献していくことのできる力を身に付けさせる必要がある。子どもたちに、社会で自立していくために必要な「真の学ぶ力」を身に付けさせなければならない。

本日全国より校長先生方が一堂に会して小学校教育の一層の充実に期するため、「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を主題として開催される本研究協議会の意義は大きい。本大会が初期の目標を達成し多大な成果が得られることを期待するとともに、本大会を主催される全国連合小学校長会の益々の発展と参会者の一層の活躍を祈念してお祝いの言葉とする。

佐賀県知事祝辞代読（要旨）

佐賀県副知事 池田英雄様

第69回全国連合小学校長会研究協議会佐賀大

会が、盛大に開催されますことに心からお慶び申し上げます。また、ご出席の皆様が、日々校長としてリーダーシップを発揮し小学校教育の充実発展に尽力されていることに深く敬意を表す。

人口減少と少子高齢化の急速な進行によって地域の活力の低下が懸念されている今日、地域活性化の原動力となる人材の育成のためには、教育は大きな役割を担う。佐賀県は、幕末維新期にいち早く科学技術を取り入れ、またそのための人材育成に努めるなど日本の近代化のトップランナーであった。特に日本の科学技術の先導者であり稀代の名君とうたわれた佐賀藩第十代藩主鍋島直正公のもとに、後に早稲田大学を創設した大隈重信や、日本赤十字社を創設した佐野常民など、未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備えた多くの人材が、藩校の弘道館で育った。弘道館では、身分の隔てなく全ての藩士に門戸が開かれ、「自ら考え自ら学ぶ自学自習」「先輩が後輩に教える仕組み」「活発な議論」などをキーワードとした「学び」が行われていた。社会変化が激しく、何が正解なのかが分からない不透明な時代においては、子どもたちにはこれまで以上に自ら考え判断し将来を切り拓いていく力が必要となる。佐賀県では、こうした弘道館の教えのもと、人を大切にし、人づくりを行ってきた歴史や風土がある。

本大会を通じて教育を取り巻く様々な問題について意見を交わし、ここで得た成果を現場で活かし、これからの教育振興につなげていくことを期待している。

全国連合小学校長会の益々の発展と参会の皆様のご健勝とご活躍を祈念し、お祝いの言葉とする。

佐賀県教育委員会教育長祝辞（要旨）

佐賀県教育委員会教育長 白水敏光様

わが国では、少子高齢化に伴う生産年齢人口の減少、グローバル化の進展、人工知能をはじめとする技術革新など社会の変化は加速度を増し予測困難な時代を迎えようとしている。物事の効率化が進み便利さが増し、他者とのコミュニケーション方法が多様化する一方で大人、子どもに限らず、人間関係の希薄さが指摘されている。その意味で、これからの未来を担う子どもたちは、厳しい時代を生きることになる。しかし、いかなる時代にあっても、子ども一人一人の社会性を育むとともにその能力を最大限に発揮させ、様々な個性や可能性を伸ばしていくことが、教育の担っている使命である。特に小学校教育は大きな役割を担っている。

本大会が、研究主題のもと、全国の校長先生

方の英知を結集し主題に迫る協議を深められることは今後の小学校教育を考える上で意義深く、その成果を期待する。本大会の関係各位に敬意を示すとともに、全国連合小学校長会の発展と参会の校長先生方のご健勝を祈念申し上げ、お祝いの言葉とする。

佐賀市長祝辞代読（要旨）

佐賀市副市長 御厨安守様

佐賀市での盛大な開催をお喜び申し上げるとともに、全国各地から多くの皆様にご参会いただいたことを心より歓迎する。また、平素から学校運営をはじめ、家庭や地域との円滑な連携を推進する学校のトップリーダーとして、ご尽力いただいていることに、深く敬意を表する。

佐賀市では、平成27年に「佐賀市教育振興基本計画 第三次佐賀市教育基本計画」を制定し、佐賀市の将来像として「豊かな自然とこどもの笑顔が輝くまち さが」を、また、教育の基本目標に「ふるさと『さが』を協働でつくる個性と創造性に富む人づくり」を掲げ、10年後の佐賀市を見据えて学校・家庭・地域・企業が一体となって取り組んでいるところである。

本日から行われる研究大会では、これまでに重ねられた研究と実践の成果を基に、これらの課題解決に向けて、更に、活気あふれる学校の創造、新たな時代を切り拓く子どもの育成を目指して、熟考熟議が重ねられることと思う。2日間が皆様方にとって有意義なものになることを祈念している。

文部科学省講話（要旨）

文部科学省大臣官房審議官 白間竜一郎様

1 教育再生実行会議の提言と取組

教育再生実行会議は、これまでに十次にわたる提言を取りまとめている。ここで今一度、全体像を理解し、小学校の新学習指導要領との関係を立体的にとらえていただきたい。

例えば、第三次提言の「これからの大学教育の在り方について」において、「小学校3年生からグローバル化に対応した英語教育を行う」ことが提案され、今につながっている。第五次提言「今後の学制等の在り方について」によって小中一貫教育の制度化がなされてきた。第六次提言「『学び続ける』社会、全員参加型社会、地方創生を実現する教育の在り方について」からは、「チーム学校」の考え方が、第七次提言「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について」からは、ICT活用による学びの環境の革新と情報

活用能力の育成やアクティブ・ラーニングの推進が、提案されている。

第一次提言から今日まで、実行会議の提言を基に、法令改正や予算事業化といった様々な形で教育再生の実現に向けた取組が進められており、一定の成果を上げているところである。

2 新学習指導要領について

改訂の基本的な考え方や方向性について、総則に集約して示されている。今年度は周知の年である。校長先生だけでなく教職員全員が総則を理解することが、抜本的な改革が行われた今回の改訂では、特に重要である。

趣旨を生かしていく上で最も大きなことは、各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立である。新しい時代に必要となる資質・能力の育成のためには、学校全体として、教育課程に基づく教育活動の質を向上させ、学習効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントを確立していただきたい。

プログラミング教育を通じて育成すべき資質・能力は、学習指導要領の3つの柱に沿って示されている。こうした資質・能力を育成するプログラミング教育を行う単位について、各学校が適切に位置付け、実施していくことが求められる。

小学校外国語教育の早期化・教育化支援として「新教材整備・効果的な指導方法の普及」「教員の英語指導力・専門性向上」「指導者の確保・充実」を考えている。小学校外国語教育に係る新教材の整備として、小学校5・6年用に児童用冊子「We Can!」教師用指導書、学習指導案を公表した。今後は、デジタル教材・ワークシートも公表する。このようにパッケージで提案することで、教員の取組を支援したいと考える。3・4年生用も年内に公表し、移行措置・先行実施対応として、希望する全ての学校に年度内に配付する。

3 教員の働き方改革について

最も力を入れている課題の一つである。中央教育審議会初等中等教育分科会「学校における働き方改革特別部会」から出された「学校における働き方改革に係る緊急提言」のポイントは、「校長及び教育委員会は学校において『勤務時間』を意識した働き方を進めること」「全ての教育関係者が学校・教職員の業務改善の取組を強く推進していくこと」「国として接続可能な勤務環境のための支援を充実させること」の3つである。現在、多方面から意見をもらっている段階である。従来業務の見直しについては、給食、休み時間、放課後、登下校の見守りなど、例を挙げて外国の実態も参考にしながら審議している。

4 オリンピック・パラリンピック教育

東京都の学校を中心にオリンピック・パラリンピック教育が進められているところである。組織委員会では、開催時期のみ盛り上がる一過性のものではなく、日本全国の子どもたちにレガシーを残せるものとするため、教育プログラム「ようい、ドン！プログラム」を展開している。大会マスコットの投票についても、全国から積極的にご参加いただきたい。

第1日 全体会

司会 中村和彦 大会実行副委員長

- 1 日程説明
- 2 運営委員会構成
- 3 本部報告
- 4 大会主題・研究課題趣旨説明
- 5 大会宣言に関する提案

本部報告（要旨）

喜名朝博 対策部長

今年度の主な本部の活動について報告する。

5月24日の第69回総会・研修会では、義家弘介文部科学副大臣よりご祝辞をいただいた。また、文部科学省各課からの行政説明があった。

7月10日には、正副会長・常任理事が、文部科学省・財務省・総務省等を訪問し、子どもたちの将来と我が国の発展のために、人的・物的措置の一層の充実と教育諸条件の整備に向けての9項目の要望活動を行った。

翌7月11日、小学校長会会長連絡協議会を行った。文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室長の白井 俊様よりご講演をいただいた。

8月28日に、福島県楡葉町への「被災地視察」を行った。東京電力福島第一原子力発電所並びに楡葉町立楡葉南小学校、楡葉北小学校、楡葉中学校を視察した。前日27日に行われた被災3県との懇談会では、児童・生徒の学習意欲の減退や不登校の増加、教職員のメンタルケアの必

要性等が課題として出された。

9月28日に三地区対策・調研担当者連絡協議会（東京会場）を開催した。大阪会場は10月24日、福岡会場は10月25日開催の予定である。

大会主題・研究課題趣旨説明

富永英美 佐賀大会研究部長

本大会でも三重大会から掲げている校長としての志、これからの時代を力強く生きる子どもを育てるという学校本来の役割を意識して、分科会に臨んでいただきたい。そして大会が終わった後には、今、目の前の子どもたちや未来の子どもたちのために何ができるのか、何をしなければならないのかという思いを佐賀大会のお土産としてもち帰りいただきたい。

本年3月に新学習指導要領が示された。社会に開かれた教育課程の実現を目指し、カリキュラム・マネジメント、目指す資質・能力、主体的・対話的で深い学びなどをキーワードとし、新たな内容や改善すべきことが示され、ますます、我々校長のリーダーシップの発揮が重要となってきた。

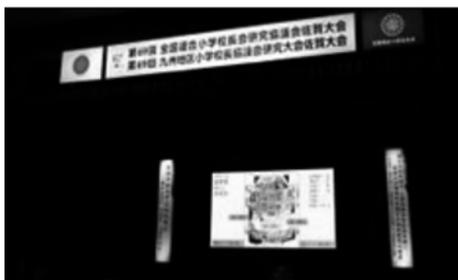
全連小では、「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」という主題において、「新たな知」「人間性豊かな社会を築く」を柱に、求められる教育や学校経営の在り方を模索しながら、校長の果たすべき役割と指導性について究明してきた。

本大会では、新学習指導要領の趣旨やこれまでの大会の成果と課題を踏まえ、副主題を「志を胸に 高きに和して 未来を創る 子どもを育てる 学校経営の推進」として、大会主題の具現化を目指したいと考えた。主題にある「新たな知」を「未来社会を創りあげていこうとする高い志を抱き、社会の変化に主体的に関わり課題解決を図る創造的な思考力やしなやかな知性」ととらえ、「人間性豊かな社会を築く」ために自らが生み出した知を、多様な価値観や個性を尊重した他者との質の高い関わりの中で磨き、よりよく生きるための知恵へと高めていくことが極めて重要なことだと考えて、このように設定した。

分科会協議の充実に向けた取組として、大会前に協議の視点をしっかりと参加者に周知し、理解してもらうために、分科会協議資料に校長の果たすべき役割と指導性を究明する柱とキーワードやキーセンテンスによる協議のまとめを新たに加えた。この協議資料を7月上旬にはHPに掲載した。

<分科会の研究課題及び研究の視点>

I 学校経営



第1分科会「経営ビジョン」

研究課題：未来を見据えた魅力あるビジョンに基づく学校経営の創造

視点1：先見性をもった魅力ある学校経営ビジョンの策定

視点2：学校経営ビジョンに基づく創意ある学校経営の推進

第2分科会「組織・運営」

研究課題：学校経営ビジョンの実現と活力ある組織づくり・組織運営

視点1：学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織づくり

視点2：学校経営ビジョンの実現を目指した学校運営の推進

第3分科会「評価・改善」

研究課題：学校教育の充実を図るための評価・改善の推進

視点1：学校経営の改善に向けた学校評価の充実

視点2：教職員の資質向上に向けた人事評価の工夫

II 教育課程

第4分科会「知性・創造性」

研究課題：知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント

視点1：「新たな知を拓く」教育課程の工夫

視点2：未来社会に貢献できる子どもを育てるカリキュラム・マネジメント

第5分科会「豊かな人間性」

研究課題：豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメント

視点1：豊かな心を育む道德教育の推進

視点2：よりよい社会を創る人権教育の推進

第6分科会「健やかな体」

研究課題：健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント

視点1：生涯にわたって運動に親しむ教育活動の推進

視点2：主体的・実践的な能力や態度を育む健康づくりの推進

III 指導・育成

第7分科会「研究・研修」

研究課題：学校の教育力を向上させる研究・研修の推進

視点1：教職員の資質・能力の向上を目指した研究・研修体制の充実

視点2：教職員に将来の展望や学校経営への参画意識をもたせる研修の推進

第8分科会「リーダー育成」

研究課題：これからの学校を担うリーダーの育成

視点1：学校教育への確かな展望をもち、優

れた実践力と応用力のあるミドルリーダーの育成

視点2：時代感覚を磨き、学び続ける人間性豊かな管理職人材の育成

IV 危機管理

第9分科会「学校安全」

研究課題：自らの命を守る防災教育・安全教育の推進

視点1：自ら判断し行動できる子どもを育てる防災教育・安全教育の推進

視点2：家庭・地域・関係機関との連携・協働を図った意図的・計画的な防災に関わる取組の推進

第10分科会「危機対応」

研究課題：様々な危機への対応と未然防止の体制づくり

視点1：いじめ・不登校等への適切な対応と体制づくり

視点2：高い危機管理能力の育成と未然防止の組織体制づくり

V 教育課題

第11分科会「社会形成能力」

研究課題：社会形成能力を育む教育の推進

視点1：社会の発展に貢献する資質・能力・態度を育む教育活動の推進

視点2：地域を誇りに思い、豊かな未来社会の実現に貢献する力を育むキャリア教育の推進

第12分科会「自立と共生」

研究課題：自立と共生を図り実践的態度や能力を育む教育の推進

視点1：子どもの自立を図る特別支援教育の推進

視点2：「持続可能な社会」の実現に向けた行動力を育む環境教育等の推進

第13分科会「連携・接続」

研究課題：家庭・地域等との連携と異校種間接続の推進

視点1：家庭・地域と連携し、特色ある教育活動を展開する学校づくりの推進

視点2：成長の連続性を生かした異校種間接続の推進



第2日 全体会

1 研究協議のまとめ

2 大会宣言文決議

中村敏智 大会宣言文起草委員長

研究協議のまとめ

富永英美 佐賀大会研究部長

昨日の分科会協議を通じ本大会の主題の究明がなされたことと思う。まず、発表者をはじめ、運営委員、司会者、参加の皆様にお礼を申し上げる。

本大会では、子どもたち自身が、高い志を抱き、他者との質の高い関わりの中で、共に未来を創造していくことを願って、5領域13分科会で協議をしていただいた。

校長が、自らの使命を自覚し、未来を見つめ、創意ある展望と計画のもと、確かな実行力をもって信頼される学校づくりに努める。そのための具体的な取組を、新学習指導要領を視野に入れながら発表や協議をしていただいたと思う。

1 分科会協議について

協議のまとめをキーワードやキーセンテンスを使いながら行う。

【学校経営】 ビジョンの明確化とシンプル化、機能する集団づくり、活力ある組織づくり、校長の調整力、学校教育の充実を図るための評価の改善、精度を高め納得感がもてる評価、適正な目標設定、教員のメタ認知力の向上などが示され、明確な方向付けをもって校長からの働きかけを繰り返すことが重要であると確認された。

【教育課程】 学びや子ども、教師をつなぐ、地域をつなぐことの大切さ、豊かな人間性を育てる学校の特色やよさを生かす、教育目標を教科横断的視点で組み立てることの重要性、運動に親しむ環境整備・場づくり、学校と地域を結んだ健康教育などが出され、社会に開かれた教育課程を目指すことが校長の役割であるということが確認された。

【指導育成】 若手教員の意識改革と指導力の向上、面談を通してのモチベーションの向上、ベテラン教師の活用、同僚性の改革、校長としてのアイデアの提案、率先垂範の大切さ、校長をトップとした「チーム学校」としての取組の重要性が確認された。

【危機管理】 防災体制の充実・組織化、関係者の切実性、関係諸機関との連携、全教職員の共

通理解、情報収集と共有化などが示され、その重要性が確認された。

【教育課題】 学校の進むべき方向への共通理解、共生社会構築のための継続的・系統的な取組、学校と家庭・地域をつなぐリーダー、地域ブロック毎の目標の共有、異職種間教職員同士の交流とミドルリーダーの連携などが出され、校長のリーダーシップによるカリキュラム・マネジメントを進めることが重要であると確認された。

2 分科会の運営について

運営面の改善として、分科会協議資料に協議の柱やキーワード・キーセンテンスを新たに加えた。分科会で目指す協議の視点をしっかりと参加者に理解してもらうことができ、協議のまとめにつながりやすかったと聞いている。また、その協議資料を事前に公開したことで、多くの方に資料を前もって周知が十分できたと思う。これは、それぞれの分科会で発表者の提言とグループ協議の内容が効果的に関連し合いながら具体的な話し合いになったことから分かる。

3 今後に向けて

平成30年度から移行措置を踏まえて先行実施時期となり、その2年後に全面実施となる。本年度は、新学習指導要領改訂の趣旨とその内容を広く周知・徹底させる必要がある。教職員をはじめ、保護者・地域からも信頼される学校づくりのため、これまで以上にリーダーシップを発揮していかなくてはならない。

今ここで私たちは、新学習指導要領改訂の背景、今後の教育に求められる使命を十分に理解するとともに、その具現化を組織的に進めていくことが大事だということを強く自覚する必要がある。

今回の分科会でも協議内容として挙げられていたが、学校が進んでいくべきビジョンの提示、綿密な計画立案、中堅リーダーの育成、組織力の活用、困難に立ち向かう意志と実行力、教師集団の凝集性を高めるための指導力の発揮など、校長の担う役割は数多くある。そこで、そのような役割を果たす時こそ私たちは、創意ある展望と計画の下、校長同士の英知を結集し、協力し合って取り組んでいくべきだと思う。

校長の志と、大会の成果と課題が、大会主題6年目となる北海道大会に引き継がれ、校長の果たすべき役割と指導性について、より一層の成果が得られるよう祈念して、研究協議のまとめとする。

大会宣言

全国連合小学校長会は、結成以来、我が国の小学校教育の充実・発展のため、真摯に研究と実践を重ね、着実にその成果を上げてきた。

本大会では、第65回三重大会から5年目となる大会主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」の実現を目指し、これまでの四大会の研究成果と課題を引き継ぎ、組織をあげて鋭意努力して取り組んできた。

現在、あらゆる分野でグローバル化や技術革新、とりわけ人工知能の利用が進み、知識基盤社会へ加速度的に移行している。また、少子高齢化、人間関係の希薄化等の社会の変化により、先を見通すことが困難な時代を迎えている。このような中、我が国は、今後の社会の方向性として「自立」「協働」「創造」の3つの理念の実現に向けた生涯学習社会を構築することが求められている。平成32年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに向けても、これらの理念に基づいて各分野で様々な取組が行われている。教育においては、今年3月に新学習指導要領が告示され、新しい時代に必要となる資質・能力の育成や各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立等についての方針が示された。

こうした国の動向を注視しつつ、東日本大震災や熊本地震等の教訓を生かし、社会において自立的・協働的に生き抜くために必要な「生きる力」をバランスよく身に付けた子どもを育成することが学校教育の責務である。また、未来社会を創り上げていこうとする高い志を抱き、社会の変化に主体的に関わり、課題解決を図る創造的な思考力やしなやかな知性といった、新たな知を生み出す力を身に付けることが求められている。そのため、小学校教育においては、自ら生み出した知を、多様な価値観や個性を尊重した他者との質の高い関わりの中で磨き、よりよく生きるための知へと高め合うことが重要である。

私たち校長は、佐賀大会における副主題「志を胸に 高きに和して 未来を創る子どもを育てる学校経営の推進」を基盤に据え、創意ある展望と計画のもと小学校教育の推進に全力を傾注し、国民の信託に応えようとするものである。

ここに、第69回全国連合小学校長会研究協議会の総意に基づき、次の決意を表明しその実現を期する。

記

- 一、新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す 小学校教育の推進
- 一、志を胸に 高きに和して 未来を創る子どもを育てる 学校経営の推進
- 一、「生きる力」の育成を目指した創意工夫ある教育課程の編成・実施・評価・改善
- 一、道徳教育を中核とし命の尊厳を重視した心の教育の一層の充実
- 一、主体的に判断・行動し命を守る子どもを育成する防災教育の推進
- 一、学校の自主性・自律性の確立と家庭・地域社会との連携・協働による教育活動の充実
- 一、安全で安心できる教育環境づくりの一層の推進
- 一、校長自らの研鑽と、教職員の資質・能力の向上を図る現職教育の充実

右、宣言する。

平成29年10月13日

第69回全国連合小学校長会研究協議会佐賀大会

シンポジウム (要旨)

『未来を創る子どもたちに』

～ あたたく つよく しなやかに ～

シンポジスト

画家 中島 潔氏

NHK名古屋放送局編成部シニアアナウンサー

内山俊哉氏

祐右衛門窯当主 15代酒井田祐右衛門氏

コーディネーター

全連小調査研究部長

針谷 玲子



針谷 本日のシンポジウムでは、未来を創る子どもたちに「あたたかさ」「つよさ」「しなやかさ」という3つの視点からメッセージを語っていただく。まず、今の自分を形成している基盤について、「あたたかさ」という視点から自己紹介も含めてお話しいただく。

内山 1964年に佐賀市で生まれた。父は浜玉町(現・唐津市)、母は熊本市の出身で、休みのたびに玄界灘や熊本城の自然風物に親しむとともに、祖父母や親戚とのふれあいがあった。小学校の遠足で登った黒髪山は、頂上からの眺めが素晴らしい。佐賀は、地味と言われるが、自然のあたたかさ、ふるさとのあたたかさにあふれている。周りの大人たちは「佐賀にはなんもなか」と言いながら、相対的でなく絶対的に楽しいもの、美しいもの、そこでしか得られないあたたかさ、豊かさを教えてくれたのだと思う。



内山氏

中学校3年の文化祭で「ベニスの商人」を演じた。練習の段階では、友達と意見が合わないことなどうまくいかないことがいくつもあった。その時の先生は、バランスのとれた「叱る」「寄り添う」「任せる」で自分たちを指導してくれた。これは、人のあたたかさである。今の時代は、この中でもとりわけ「寄り添う」が先生には必要なのではないか。

中島 私は、唐津市の田舎で育った。高校生の時、大好きだった母が病気で亡くなり、まもなく父が再婚した。それを許せなかった私は、18歳で家を出て故郷を離れた。下田に行き温泉を掘る仕事に就いたが、とても辛い生活だった。少しでも楽しい時間を見つけないと小学生の頃から好きだった絵を描くことを始めた。すると、あたたかい気持ちになり、仕事が辛くなかった。



中島氏

それは、夜になれば絵が描けると思って仕事をしてきたからだ。皆が寝静まってから描くので、最初は寝ている同僚の足の裏ばかり描いていた。次に、ふるさとの畑のスイカや川を描いた。ふるさとの父の仕事、母の様子、作ってくれたご飯、優しい友達の友達、学校生活の思い出。あたたかさは、その中にいると分らないものだ。

私の作品に「峠の雪」というバスを待つ二人の子どもが寄り添っている様子を描いたものがある。あたたかさは、厳しい寒さの中で一層大切なものとなる。子どもの頃に感じたあたたかさは一生の宝である。心の育つ時期に、周りにあたたかさがたくさんあふれていたらいいと思う。

柿右衛門 私は、有田の山育ちで、小学校は木

造の平屋だった。水拭きをする50センチしか進まないほどささくれた廊下やけんかゴマをした校庭にあった相撲の土俵などが、なつかしい思い出である。小さい頃から外遊びが中心の生活だった。自然の山の中で体験した様々なことが、私の人格の骨組みを作っていると思う。



柿右衛門氏

作品を作るにあたり、特に意識している訳ではないのだが、カシ、ホトトギス、イチゴなどの植物を見た記憶や子どもの頃好きだったものをモチーフとして描くことが多い。

子どもたちには、子ども時代の原体験を大切にしてほしい。今は、原体験と言えるような経験が減っていると感じる。

針谷 次に「つよさ」では、辛かったことや大きな変化をどのように乗り越えられたのか、子どもたちに期待することは何かをお話しいただきたい。

中島 絵の勉強をしていくが、独学であったため自分で絵を持ち込んでも全ての画廊に断られた。広告代理店に勤務し、商業デザイナーとなった。自分の絵を企業がどんどん買ってくれたが、とても疲れて28歳の時にパリに行き、毎日美術館めぐりをした。「自分にはこんなに上手に描けない」と落ち込んでいた。ある日、画材を持った若者の集団について行ったところ、クロッキーを描いていた。それから自分も勝手にクロッキーに参加した。後にそこは、パリでも一番の美術学校であることが分かった。そこで、勉強すること、学ぶということの楽しさを初めて知った。ある日教師に見つかってしまったが「素晴らしい線です。あなたは描きなさい。」と褒められた。褒められることによってつよくなれる。好きなことをやり続けたつよさもある。

気持ちが折れそうなときに、いつも心惹かれるのが各地に伝わる「祭り」である。私の作品にも唐津の祭り「唐津くんち」を描いたものがある。長い時をを超えて受け継がれているものにはつよい力と命が宿っている。実際に祭りに参加し、見えないものへの畏れと感謝、綱を曳く一体感とエネルギーを感じた。

柿右衛門 襲名して工房を任されたことが私にとって一番の大きな変化である。14代柿右衛門である父は、病気になるまで半年で亡くなった。私たち家族にとっては、本当に突然のできごとだった。襲名してすぐの頃は13代からのベテランの職人が現役でたくさんいて支えられた。若い職人が増えてきているので、職人を世代交代させながら工房を作り変えることがこれからの私の一番の仕事である。自分がデザインしたものを工房に渡すと、できあがって戻ってきたものは14代風のものになっている。職人は手で覚えていくので、一つ一つ指摘して直させる。分

業体制で作業をしているが、私の作品として世に出るので、できるだけわがままに自分の思いを伝えていかなくてはならない。形を作る細工場からは、下がすっきりした14代好みのものができてくる。それを自分の形にしていく。自分の作風を固めていくのは一生の仕事だと思っている。思いを伝えても結果はすぐにはでない。変えていくことに対するつよさが必要になる。

内山 子どもの頃、野球に熱中していた。ところが、中学校ですぐに野球部をやめてしまった。それでも野球好きは変わらなかった。野球について調べたり、スコアブックを付けたりした。スポーツ実況を志し、アナウンサーになり、福岡、佐賀に勤務している間に若手の登竜門とされる甲子園の高校野球の実況も経験した。名古屋に転勤が決まり、念願のプロ野球の実況に専念できると喜んだが、名古屋に行ったら先輩はプロ野球担当のアナウンサーばかりで出番がなかった。

報道リポーターをやりながら「話が違う」とため息をつく毎日であったが、「実況だけがスポーツではない。スポーツのレポートを作ればいい」と考え、当時開幕を控えていたJリーグを題材にしたレポートを提案した。名古屋グランパスの外国人選手を取材し、30分番組を制作した。当時、アナウンサーが番組をつくるということは珍しかった。この番組をきっかけにしてNHKスペシャルの制作を携わり、初めてイギリスを取材し、ロケを担当した。それまで知らなかったサッカーという競技の魅力、奥深さを知ることになった。パブでは、スポーツを語る楽しみも知った。この経験が、後にワールドカップ実況を行う出発点となった。

野球部を辞めてしまった自分のような挫折組でも好きなことを続けていけば道は開ける。ただし、チャンスは待っただけではだめ。野球にこだわらず未知の分野に挑戦しようとした「自分なりのつよさ」が道を開いたのではないかと思う。

先生たちには、子どもたちの夢を大切にしてほしい。「おまえには無理だ」と決して言わないでほしい。

針谷 最後の「しなやかさ」では、これからの子どもたちに身に付けてほしい「しなやかさ」について伺いたい。

柿右衛門 柿右衛門窯では初代から完全分業体制の中で仕事をしている。職人とのコミュニケーションはとても大切である。私が思いを伝える、職人が技術で応える、このコラボレーションで今の時代の柿右衛門ができていく。わがままに思いを伝える一方で、職人の意見を聞き、修正する。その過程で自分のスタイルが決まってくる。職人は、当主の思いを受け、自分の中で答えを出し、自分の作業に反映させる。お互いの思いを反映させるその繰り返しのうちの作業が相乗効果を生み、思った以上の作品ができ

てくることにつながるのではない。作品を作る技術は、現代のスタイルになってきているが、柿右衛門窯を支えてきた精神は変わらない。

子どもたちには、自分で考えて思いを伝えるつよさ、そして他人の思いを受け入れることのできるしなやかさを身に付けてほしいと思う。

内山 ワールドカップフランス大会では、通訳がバリ在住の日本人画家だった。彼は、サッカーを全く知らなかったもので、仕事が進まず困った。しかし、誰もがサッカーに興味があって、サッカーが好きとは限らないと思い直し、「無理をさせない、無理をしない」という考え方で接するようになった。自分と違う価値観をもった人とも一緒に仕事をしていかなくてはならない。違いを越えて相手をリスペクトすることが必要である。

海外のオリンピック中継ではNHK、民放のアナウンサーが一緒になって放送を担当する。取材、実況コメント、声のトーンなどそれぞれの局によってスタイルは異なる。それぞれが自分たちのスタイルを押し通すと、放送のトーンがばらばらになってしまう。そこで、競技と選手第一で、独り善がりにならないようにいつもの放送より「平易に」「分かりやすく」「丁寧」伝えることを皆で話し合い、共通理解した。

スポーツ中継は何が起るかわからないので、しなやかでなければできない。子どもたちには、失敗やチャレンジの中からしなやかさを身に付けてほしい。

中島 数年前、私は「地獄心音図」に挑んだ。現代社会で忘れられている「良心」について見つめ直す機会を作ったからである。周りの大人たちの反応は複雑だった。正直なところわざわざ怖いものを見たくないという雰囲気だった。子どもたちに見せる時も教師や保護者は反対だった。ところが、子どもたちは柔軟だった。最初は「わあ、おもしろい」と言い、次に私の説明を聞きながら食い入るように見入っていた。「誰も見ていなくても正直に生きてほしい」という私の気持を正面から受け止めていた。子どもの心のしなやかさを実感した。子どもはもともとしなやかさをもち合わせていると思う。しなやかさを大切にし、個性を伸ばし、自分のもつ無限の可能性を広げていってほしい。

針谷 私たち校長は、このシンポジウムから多くのご示唆をいただいた。今後の学校づくりに生かしていきたい。

閉会式

- | | | |
|---|--------|--------------|
| 1 | あいさつ | 種村明頼 大会会長 |
| | | 下川雅彦 大会実行委員長 |
| | | 角野 誠 次期開催地代表 |
| 2 | 閉会のことば | 前田好文 大会副会長 |

第227回 理 事 会

10月11日（水）午後1時45分開会

グランデはがくれ

進行 升屋 庶務部長

1 開会のことば 井上 副会長

2 会長あいさつ（要旨） 種村 会長

明日から佐賀大会が始まる。佐賀県の校長先生方には、この大会の成功に向けて多くの時間を費やし、準備を進めていただいた。大成功に終わることを実感している。各理事の皆様にはよろしく願います。

(1) 8月29日中央教育審議会初等中等教育分科会の特別部会から「学校における働き方改革の緊急提言」が出された。その中で①勤務時間を意識した働き方の推進②学校教職員の業務改善③国としての対応策、が示されている。国の対応として人的配置や業務改善について触れられている。国には付け焼刃でない対応をお願いしたい。また、現場をしっかりと見て改革を進めてほしい。

2日後に文部科学省は概算要求を行った。この中で、①小学校専科教員の充実（3年間で6,600名）②教員の負担軽減のための予算、が盛り込まれている。今後、全連小としても教員の定数改善、教職調整額の見直し等についても引き続き要望していく。

(2) 6月1日に教育再生実行会議の第10次提言で学校における子どもと向き合う時間の確保として、地域ごとの学校休業日の分散化が示された（キッズウイーク）。その対応として、9月13日「学校教育法施行令の一部を改正する政令」が出された。学校教育法施行令に、新たに「体験的活動休業日」が例示として示されたが、導入にあたっては、学校が混乱しないように留意事項が示され、教育課程へ影響は少ないといえる。

我々としては管理運営規則を作成する各教育委員会の動きを注視していきたい。

(3) 9月21日に、都道府県・政令指定都市の教育委員会外国語担当の指導主事を対象に、新学習指導要領に対応した、教材説明会が行われた。今後、外国語教育に対して、国や教育委員会、学校がどのように対応していくかの具体的な説明があった。来年度から、移行措置で6年生は5年生の学習内容を学習せず、6年生の内容から外国語を学ぶことになる。説明会では、来年度の6年生について、5年生の学習内容を含む年間指導計画例の案が示されているが、来年度の6年生は、中学校の学習指導要領の全面実施の平成33年度に、中学3年生となることもあり、学習内容を絞った指導を受けてきた生徒の

習熟等の課題が挙げられている。これについても、文部科学省や中学校長会と連携を図り、対応していく必要がある。「外国語科において短時間学習を実施する際の注意点」も示された。3・4年生の外国語活動については、短時間学習で実施することは困難であると示されているので、次年度以降の教育課程編成では、ご留意願う。

この教育改革の激動期の校長会の役割は重要である。理事のみなさんと情報連携を密に行い、対応していきたい。

3 前事務局長への感謝状贈呈

4 報告 司会 前田 副会長

(1) 会務・事業・活動の概要 升屋 庶務部長

(2) 会計 山田 会計部長

・基金管理状況 ・負担金納入状況

(3) 研究大会について

・佐賀大会について 下川 佐賀県会長

・北海道大会について 角野 北海道会長

開催日：平成30年10月4日（木）・5日（金）

(4) 要望活動について 喜名 対策部長

7月10日、「平成30年度小学校教育の充実に関する文教施策並びに予算に関する要望書」を文科省、財務省、総務省へ提出し、9項目の要望活動を行った。そのうち特に①教員の時間外勤務の調整額の引き上げ②震災復興に関わる人的配置の充実及び施設・設備・教材等の迅速な整備③教員の定数の引き上げ並びに専科教員の充実、について強く要望してきた。

(5) 調査研究部特別委員会報告書について

針谷 調査研究部長

『「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて～新学習指導要領への参考資料～』をまとめた。全連小HPに掲載中である。

(6) 東日本大震災被災地視察等について

①被災地視察及び懇談会報告 喜名 対策部長

8月27日（日）・28日（月）に、種村会長外3名で福島県を訪問した。3か所の学校、東京電力福島第一原子力発電所を視察した。

懇談会では、子どもたちだけでなく教員のメンタルヘルスも必要なこと、震災を経験していない子どもたちの不安定なことが課題として挙げられた。復興に向けて多くの校長先生方がご尽力されている。

②岩手県より報告 外山 岩手県総務部長

多くの励ましや支援に対して感謝申し上げます。今日で震災から6年7か月になるが、敷

地内に仮設住宅が建っている学校が10校ある。子どもたちは概ね落ち着いてきているが、緊急地震放送の警報音がもともと登校できなかったり、避難訓練に参加できなかったりする子どももいる。仮設住宅でのストレスを抱える子どもなど個別への対応が要求されている。限られた範囲での校庭使用やスクールバス登校などによる体力低下も問題となっている。

県校長会では、東日本対策特別委員会を設け、被災地区の把握、支援や交流活動に努めている。

(7) その他

- ・海外教育事情視察報告 内藤 事務局長
- ・日韓教育文化交流について 針谷 調査研究部長

5 情報交換

「教員の働き方改革の取組状況について～各都道府県の取組と校長会との関わり～」

司会 島崎 常任理事

北海道 時間外勤務の解消に向けて、市町村教育委員会・校長会・一般教諭・PTAで組織する「時間外勤務等縮減会議」を開催し、毎年重点取組を掲げ実効性の強い取組を提言している。今年度の内容を紹介すると、①週1日程度の休養日を設定する部活動の見直しの徹底②改正した制度の周知と有効活用③管理職による業務管理や業務改善の一層の充実④定時退勤日や時間外勤務の削減週間等の一層の取組、などがある。北海道の独自の調査も実施している。

青森 県校長会では、現在、第4学年まで実施している33人学級の枠を全学年まで広げ、教職員の負担軽減を県教育委員会に要望している。多忙感解消として部活動の活動日や活動時間の縮減について共通の申し合わせをして負担軽減に取り組んでいる。県教育委員会では、平成26年度に教職員の勤務実態調査を実施し、多忙化解消委員会の設置を行っている。平成27年度に各学校へ報告書の配付があった。内容は①働きやすい環境の構築②部活動時の活動軽減③会議・打合せの効率化④成績処理・事務処理の効率化⑤学校行事負担軽減、である。

新潟 平成22年から県・政令市ともに多忙化解消に向けて取り組んでいる。10項目を提示し、取り組みやすい事柄から実施、数値目標の設置、校長のマネジメント研修会を通じ、浸透化を図っている。県教育委員会が最終退勤時刻午後7時の提示、年次有給休暇の計画的な取得推進を示したが、多忙化の解消については、時間的には頭打ちの状態である。そこで、多忙感軽減のために適正な休暇の取得へシフトしている。出退勤時刻の把握を県内、政令市内全校で実施している。これらのデータを多角的に分析し、今後の対策を講じる予定である。

静岡 「時数増」に伴う抜本的な改革は「定数増」である。要望を繰り返し続けている。

「未来の夢プロジェクト」モデル校4校に、教員ではないコーディネーターを配置し、業務のアドバイスを行う。18時以降学校の電話は教育委員会へ転送（県）。校務支援システムの導入準備、「部活動ガイドライン」の策定（静岡市）、市内8か所に事務センターを設置し、教員が行っていた事務の軽減化を図る方向で進んでいる（浜松市）。

兵庫 平成25年度に「教職員の勤務時間適正化新対策プラン」を策定、平成28年度に勤務時間適正化に向けた取組課題検討委員会を設置し①教職員の勤務実態調査②勤務時間に係る教職員の意識調査③学校訪問における聞き取り調査を行い、平成29年度に「教職員の勤務時間適正化推進プラン」を策定した。校長会としては、①勤務時間適正化に向けた実効性のある取組の推進②学校運営を円滑に行うための人的配置、を引き続き要望していく。

鳥取 平成25年度から改善に取り組んでいる。民間の力を活用し、ひと月当たり16%の削減ができた。平成30年度に全県統一の校務支援システムの導入を進めている。これにより、市町村を越えた人事異動でも、速やかな対応が期待できる。午前5時間授業制度を実施し、教員の午後の時間の確保ができた学校もある。

香川 数年前から教育基本計画の4本柱の一つに「業務改善」を掲げている。県のHPに各学校の取組を紹介している。働き方改革部会を立ち上げ、業務改革を検討している。学校業務改善アドバイザーを招いての講演会を実施した。教職員1台配置のパソコンを利用した勤務実態調査を検討している。学校閉庁日の取組も温度差はあるが、実施の方向で進んでいる。

大分 大分県は、小学校の部活動は社会教育が担っている。学校職員が手を出すことはほとんどない。県・市とも取り組んでいるが、まだまだという感がある。大分市では「第3水曜日は定時退庁日」としているが、職員が退勤するまで校長は帰れない。夏季休業中の閉庁日はかなり定着してきた。県として事務のセンター化は数年前から進んでいるが、小規模校には事務職員の削減となり、今後も検討が必要である。

6 連絡・その他

- (1) 広報部より 戸倉 広報部長
 - ・平成29年度「全連小速報」3号・5号の電子版のみの発行について
 - ・「小学校時報」の1月号新春対談について
 - ・教育研究シリーズ第55・56集の購読依頼について

- (2) 事務局より 内藤 事務局長

7 閉会のことば

井上 副会長